『差異と反復』の解析と再構成の試み(1)

ZAITSU, Osamu / 財津, 理

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Hosei Society for Philosophy / 法政哲学

(巻 / Volume)

13

(開始ページ / Start Page)

25

(終了ページ / End Page)

35

(発行年 / Year)

2017-03-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013947>

『差異と反復』の解析と再構成の試み — 1 —

財 津 理

序

『差異と反復』（一九六八）は、それが書かれた当時のフランスにおける時代の思想的、芸術的雰囲気伝えてる。

「本書で論じられる主題は、明らかに、時代の雰囲気（四つ）のなかにある。その雰囲気（四つ）のしるしとして、つぎの点が、存在論的《差異》の哲学にますます強く定位しようとしていること、つぎに、構造主義の活動が、或る共存の空間における差別的な諸特徴の配分に基づいていること。さらに、現代小説という芸術が、そのもっとも抽象的な省察ばかりでなくその実際のな

技法においても、差異と反復をめぐって動いていること。最後に、無意識の、言語の、そして芸術の力でもあろうような、反復の本来の力が、あらゆる種類の分野において発見されていること。これらすべてのしるしは、或る一般化した反ヘーゲル主義に数え入れることができる。つまり、差異と反復が、同一的なものと否定的なものに、同一性と矛盾に取ってかわったのである」。

ドゥルーズには、後期ハイデガー哲学、構造主義、現代小説（ジョイス、ベケット、アラン・ロブ・グリエなど）、そしてラカンの精神分析などが、ヘーゲルの弁証法に抗する当時の思想的・芸術的雰囲気として感じられていたのだろう。

ドゥルーズは、『差異と反復』出版の一八年後に、「『差異と反復』アメリカ版への序文^②」でこう語っている。

「……私を襲い熱狂させたヒューム、スピノザ、ニーチェ、ブルーストを研究したあと、私は「哲学すること」を試みたのだが、その最初の著作こそ、『差異と反復』であった。その後の私の仕事はすべて、この書物に繋がっていた。ガタリとの共著でさえそうである（もちろん私は今自分の観点から語っている）。では、どうしてひとりの人物にしじかじかの問題が結びつくのだろうか。たとえば、なぜ、私に取りついていたのは差異と反復であって、それ以外のものではないのだろうか。しかも、差異と反復は、別々にはなく、結合したかたちで私に取りついたのであるか。もとよりこれに答えるのはたいへん難しいのだが、ともあれ、差異と反復は、必ずしも新しい問題ではない。なぜなら、哲学史は、そしてとりわけ現代哲学は、つねにこの問題に取り組んでいたからである。……」

ドゥルーズは、これを一九八六年、六一歳のときに書いた^③。彼が自死する九年前のことである。彼は、このときすでに、『差異と反復』以後の大作のほとんどを刊行してい

る。要するに、この序文は、ドゥルーズが晩年におのれの仕事を回顧して書いたものであろう。

私は、ドゥルーズがこの「アメリカ版への序文」で語っていること、すなわち『差異と反復』はそれ以前の彼の独特な哲学史的研究的集大成であり、『差異と反復』以後の作品は『差異と反復』から流れ出たものであるということ、これを踏まえたうえで、『差異と反復』の解析を開始しようと思う。すなわち、『差異と反復』における諸概念を、彼の他の諸著書のそれと関連づけるといふことだ。もちろん私は、『差異と反復』がそれ以前の諸作品に還元されうるといふことを主張したいわけではない。

他方で、ドゥルーズはこの「序文」以前に、ミシェル・クレソール宛の手紙で、主に『アンチ・オイディプス』に関して本の読み方を批判的に語っている。すなわち、ひとりの著者が書いた一冊の本は、後で書かれた本の内容を含んでいる、あるいは逆に、先行する本の内容は後続する本に含まれているという読み方があるが、このような読み方をする、と、読者による注釈や解釈が際限なく重ねられることになる、と。ドゥルーズはもちろん、自分の本をそうした読み方で読んでほしくないと考えている。だが私は、『差異と反復』に関しては、ドゥルーズによる読み方の指示には従わない。解析が同時に再構成になるような仕方

『差異と反復』を読むつもりである。

ところで、『差異と反復』の冒頭に置かれた「はじめに」の内容を真に受けるドゥルーズ研究者は少ないようだ。この「はじめに」の文章が、従来の哲学書に比べると、やや奇矯であり、ふざけているように見えるからだろう。

「哲学的表現の新しい手段の追究は、ニーチェによって開始されたのだが、今日では、その追究をたとえれば演劇や映画のような、或るいくつかの芸術の刷新に見合ったかたちで遂行しなければならない。この視点から、いまやわたしたちは、哲学史をどう利用するべきかという問いを立てることができる。哲学史は、絵画におけるコラージュの役割にかなり似た役割を演じるべきだと、わたしたちには思われる。哲学史とは、哲学そのものの再生⇨再生産である。哲学史における報告は、真正正銘の分身⇨複製として振舞わなければならないだろうし、その分身⇨複製に固有の最高度の変容を包含しなければならないだろう（口髭をはやしたモナ・リザ〔マルセル・デュシャンの作品を示唆している…訳者〕と同じ意味で、哲学的に髭をはやしたヘーゲル、哲学的に髭をそったマルクスを想像してみよう⁵」。

したがって私は、『差異と反復』をその外部（ドゥルーズの他の諸著作）と関連づけるばかりでなく、それと同時に『差異と反復』をその内部にとどまって解析するつもりである。内在的分析のほうが、さらに重要になるはずである。

『差異と反復』は、原書で四〇〇頁を越え、翻訳（旧ハードカバー版二段組）で五〇〇頁を越える書物であるが、その叙述の展開は、ヘーゲルの哲学書におけるように、順を追って議論を重ねていくような具合になっていない。『差異と反復』では、たとえば、序論で現れた断片的なトピックが、第二章で再度現れ、また結論で繰り返されるといったケースが多い。断片が変化しながら距離を置いて反復されていくとも言えようか。

たとえば、いずれわれわれが問題として展開するように、第二章「それ自身に向かう反復」の最初の部分で、物質概念の例として、唐突にライブニッツの「瞬間的精神」が何の説明もなく持ち出されている。ところが、この物質概念は「序論」ですでに言及されており、しかもヘーゲルのいわゆる『自然哲学』における「疎外された概念」、「疎外された精神」としての自然に関連づけられている⁶。さらに、「結論」で再び「疎外された概念」が物質の定義として現れる⁷。ここからわかるように、比喩的な意味で、『差異と

『反復』という全体集合のなかでは、それに属する部分集合（たとえば瞬間的精神についての記述）が離散的に配置されていると言えよう。

したがって、問題として展開するということは問題を反復するということになるのであって、私は『差異と反復』の内部における離散的な諸々の部分集合のあいだにラインを引き、かつそれらを引きよせて考察するつもりである。

この方法は、『差異と反復』の理解に貢献するところもあるだろうが、コラージュ的作品としての『差異と反復』の全体像を浮かび上がらせることにはならない。むしろ、解析の結果が『差異と反復』の再構成になり、それによって、ありのままの全体像ではなく、反復されて変化したものとしての『差異と反復』の全体像が示されるはずである。全体像は即目的には存在しないと言ってもよい。

もちろん、私のやり方、つまりコラージュの離散的な材料を整理して取り集めるというやり方は、『差異と反復』の書き方を、すなわち哲学的表現の新たなドゥルーズの手法あるいはスタイルを暴力的に破壊することにもなるわけだが……。だが私は、ヘーゲルの理性的汎論理主義とは異なるドゥルーズ独特の狂気の汎論理主義のロジックに、『差異と反復』内部の離散的な部分集合をたどることで、照明を当てることができるのではないかと考えている。ところで

『差異と反復』のテキストは、邦訳を用いる。『差異と反復』の拙訳は、何度か部分的に改訳したが、これから継続していくことになるこの『差異と反復』の解析と再構成の試み³³において全面的な改訳を遂行するつもりである。

では、以上に述べた二種類の解析は、すなわち外部および内部における関連づけは、『差異と反復』のどこから始めるべきだろうか。どこから始めてもよいだろうが、たとえば、『差異と反復』の「序論」のタイトルは、『差異と反復』という書物のタイトルを逆にした「反復と差異」であり、主に反復が論じられている。そしてドゥルーズは、その「序論」の末尾でこう語っている。

「差異と反復という二つの基礎概念の出会い、もはや最初から定立されえず、反対に、反復の本質に関わるラインと、差異の理念に関わるラインという、二つのラインが相互に干渉し交差することによってようやく出現するにちがいない」³⁴。

したがって、分析の出发点を、差異に置こうと反復に置こうと、結局は差異と反復の出会いに行き着くのであろうが、私は反復から始めようと思う。すなわち、第二章「それ自身に向かう反復」における反復論あるいは時間論から

始めようと思う。そうするのは、この第二章が、常識的な意味で比較的筋をとりやすい行論で構成されているからである。こうすることで、この私の論文が、ドゥルーズを読んでいる読者にも比較的わかりやすいものになるはずである。実際、フランス本国でも、『差異と反復』を読み通している読者は、専門的な研究者を除いては、それほど多くないと思われる。私は、ドゥルーズが、日本でもフランスでも、またドゥルーズ論が量産されているアメリカなどでも、ややアカデミズムの専門家の独占物になりつつある状態を懸念している。『差異と反復』を、できれば、一般の読書人にも近づきやすい哲学書にしたいと願っている。

さきほど、哲学的表現の新しい手段の追究を或るいくつかの芸術の刷新に見合ったかたちで遂行しなければならぬということドゥルーズの言葉を引用したが、『差異と反復』における「哲学的表現の新しい手段の追究」は、芸術ばかりでなく、数学や物理学とも連携して遂行されている。では、ドゥルーズ哲学は、芸術や科学に恩恵をもたらす思想であろうか。たとえばソーカルとブリクモンは、こう述べている

「最近死んだジル・ドゥルーズは、もっとも重要な現代フランスの思想家の一人という名声に包まれている。」

る。……これらのテクスト（ドゥルーズとガタリの諸著作）には実に様々な科学のテーマが登場する。ゲードルの定理、超限基数の理論、リーマン幾何学、量子力学などなど。しかし、これらの取り扱いはあまりにも短く表面的なので、すでにそのテーマに精通しているでもない限り、読者は何一つきちんとしたことを学びえない。そして、専門的な知識のある読者には、これらの議論がたいへん無意味であり、ときに理解できれば平凡で混乱していることがわかるのである。ドゥルーズとガタリの主題は哲学であり、科学の解説でないことはわれわれも十分承知している。しかし、このような消化不良の科学的な（あるいは疑似科学的な）専門用語の洪水によってどのような哲学上の効果が達成されるのだろうか？ われわれの見解では、もっともありそうな説明は、ドゥルーズとガタリは、幅広いがきわめて浅い学識しかもっておらず、それを著作に陳列しているということである¹⁰⁾。

ではドゥルーズ自身は、哲学と、科学や芸術との関係をどう考えているのだろうか。やはり『差異と反復』アメリカ版への序文」におけるドゥルーズの説明に耳を傾けよう。

「どの哲学も、科学や芸術を語る哲学自身の方式を、それら科学や芸術との同盟を確立する方式として、獲得しなければならぬ。だが、それはとても難しいことだ。なぜなら、哲学は、もとよりどれほどささいな優越性も要求することができないにせよ、しかしおのれ自身の固有な諸概念が科学的な機能 $\parallel$ 関数や芸術的な諸概念を把握しようという点に関連してはじめて、おのれ自身の諸概念を創造し、提示するからである。哲学的概念は、けっして科学的な機能 $\parallel$ 関数や芸術的な構築と一緒にたにはならないのだが、それでもなお、科学や芸術的スタイルのしかじかの領域のなかで、それら科学的な機能 $\parallel$ 関数や芸術的な構築との親和性をもっているのである。ひとつの哲学の科学的内容や芸術的内容は、たいへん基本的なものでありうる。なぜなら、哲学は、でしばばって科学や芸術を前進させようとする必要はないとしても、やはり基本的であるそのような機能 $\parallel$ 関数やそのような構築そのものに関する本来哲学的な諸概念を形成することによってのみ、哲学それ自身が前進できるからである。哲学は、科学からも芸術からも独立してつくられることなどあるわけではない」¹¹。

『差異と反復』の第四章「差異の理念的総合」と第五章「感覚されうるものの非対称的综合」が、まさに科学に関して哲学的考察を遂行している章である。たしかにドゥルーズが言うように、哲学は、哲学自身の概念を創造することを目的としているのであって、でしばばって科学や芸術を前進させようとするのは哲学の目的ではない。デカルトやライプニッツのような本来数学者でありかつ自然科学者である哲学者でないかぎり、そんなことはできるはずがない。しかも一七世紀ならいさ知らず、二二世紀の現代にあって、現代数学や現代物理学を、哲学史から出発した哲学者がリードすることはきわめて困難であろう。

けれども私は、科学や芸術で仕事をすする人々や、あるいは一般の読書人が、『差異と反復』における哲学的諸概念から、自由に、何らかのポジティブなインスピレーションを受け取ることが、できるのではないかと思っている。

一 『差異と反復』第二章の解析

(一) 時間論の構造のラフスケッチ

あらかじめ、『差異と反復』第二章「それ自身へ向かう反復」の時間論の構造を、その内容に立ち入らずに、形式的かつ概略的に記述しておこう。

まず、第二章の前半で、過去の何人かの哲学者の理論にそくして、三つに分節された時間論が展開される。

一、「時間の第一の総合——生ける現在」、これは現在をテーマにした時間論であり、「経験的な受動的総合」と呼ばれる。ヒューム、ベルクソン、フッサールが参照され、過去と未来は生ける現在に属する二つの次元とされる。

二、「時間の第二の総合——純粹過去」、これは、過去をテーマにした時間論であり、「超越論的（先験的）な受動的総合」と呼ばれる。プラトン、ベルクソン、カントが参照され、「かつて現在であったことのない純粹過去、現在が過去化したのではない純粹過去」が時間の第一の総合の根拠であるとされる。

三、「時間の第三の総合——空虚な形式としての時間」、これは、未来をテーマにした時間論である。ただし、「受動的総合」とは呼ばれていない。ニーチェにもついで、未来もまた反復とされ、これが永遠回帰と呼ばれる。この未来の反復としての永遠回帰、過去も現在も回帰させず、絶対に新しいものしか生産しないとされる。

さらに、第二章の後半で、ただし今度は様々な精神分析理論にそくして、以上の三つの時間の総合が反復される。

ここで、ドゥルーズの「時間の総合」という名称について少しばかり指摘しておこう。すでにヴェロニク・ベルゲンも指摘していることだが、この名称には、ハイデガーの『カントと形而上学の問題』の第三二節以下からの影響が見られる。ハイデガーは、ペリッツ編のカント『形而上学講義』から、構想力（想像力）に現在・過去・未来の時間的性格を見いだし、さらに『純粹理性批判』第一版におけるいわゆる三段の総合、すなわち「一、直観における覚知の総合」、「二、構想力（想像力）による再生の総合」、「三、概念による再認の総合」に、現在性、過去性、未来性をあてがっている。ここから、カントの三つの「総合」が、「時間の総合」と呼ばれることがある。

ハイデガーと同様、ドゥルーズも想像力に重要性を見ている。そしてドゥルーズの三つの「時間の総合」も、現在、過去、未来に対応するのだが、その内容は、ハイデガーによるカント三段の総合の解釈を引き継いでいない。

また、ドゥルーズの「受動的総合」という名称は、フッサールの、『受動的総合の分析』というより、『デカルト的省察』¹⁴の第三八節「能動的発生と受動的発生」における「受動的総合 *synthèse passive*」から採用されたものと推測できる。ドゥルーズは現象学に批判的な態度をとっているが、この第三八節はドゥルーズに大きな影響を与えて

いる。

たしかに、ドゥルーズと、ハイデガーとを、そしてフッサールとを比較研究することは、きわめて生産的な仕事になると思われるのだが、そうした比較研究は、この「差異と反復」の解析と再構成の試み」のテーマではない。まず、「差異と反復」そのものの時間論、反復論を説明することが、われわれの目的である。ドゥルーズのハイデガー対応は、『差異と反復』で顕在化しているそれよりも、もっと深いものがあるように思われるが、しかしこれに関しては稿を改めて論じるほかはない。

(二) 第二章第一段落の解析―1

ここから、問題生産機械としての『差異と反復』の具体的な解析に入る。最初に『差異と反復』の各段落のテキスト（私が改訳したもの）を引用し、そのテキストに対して問いかけるといふ形式で解析を遂行する。

さて、第二章「それ自身へ向かう反復」の冒頭の段落は、三つの「時間の総合」の具体的な議論が始まる前に置かれている。この最初の段落には「反復：何かが変化させられること」という小見出しが付けられている。この段落は、第二章全体の「序」に相当するものと思われる。

「反復：何かが変化させられる」と

反復は、反復する対象において、何も変化させないが、その反復を観照する精神においては何かを変化させる。ヒュームのこの有名なテーゼは、わたしたちを問題の核心につれてゆく。反復は、「事例や要素の」それぞれの呈示∥現前化は完全に独立しているということを経上へ折り込んでい」のだから、どうして反復は、反復する事例や要素において何かを変化させることがあるか。反復における不連続性と瞬間性の規則は、一方が消えてしまわなければ、他方は現れない」と定式化される。例えば、〈瞬間的精神（メン・モメンタネア *mens momentanea*）としての物質〉の状態である。しかし、反復はできあがるそばから壊れてゆくものである以上、どうして、「二番目のもの」、「三番目のもの」、また「それは同じものだ」と言えようか。それ「反復」は即自を有していないのだ。そのかわり、反復は、その反復を〈観照する〉精神において何かを変化させるのである。そのようなことが、〈変容〉の本質なのである。ヒュームは、たとえて、〈A B、A B、A B、A ……〉というタイプの、事例の反復をとりあげている。それぞれの事例、つまりそれぞれの客観的なシーケンス〈A B〉は、他の事例

つまり他のシークエンスから独立している。反復は、(ただし正確には、ここではまだ反復を語ることはできないのだが)、対象においては、あるいは〈A B〉という〈物の状態〉においては、何も変化させない。そのかわり、観照する精神のなかに、〈ひとつの変化〉が生産される。すなわち、ひとつの差異が、つまり何か新しいものが、精神の〈なかに〉生産されるのである。Aが現れると、いまや私は、Bの出現を予期する。これこそが、それ〔反復〕の構成に必然的に入らざるをえない〔関与せざるをえない〕或る根源的な主観性としての、反復の〈対自〉なのであろうか。反復のパラドックスとは、以下のようなことではないだろうか。すなわち、反復を観照する精神のなかにその反復が導き入れる差異つまり変化による以外には、すなわち、精神が反復から〈抜き取る〉或る差異による以外には、反復を語ることができないということ。¹⁹⁾ (一) 記号およびそのなかの言葉は、訳者が補ったものである。〈〉記号は、文意をとりやすくするために、訳者が挿入したものである。)

冒頭の文章、「反復は、反復する対象において、何も変化させないが、その反復を観照する精神においては何かを

変化させる。」は、ヒューム『人性論』におけるいくつかの叙述のパラフレーズである。¹⁹⁾ ドゥルーズの処女作である著書『経験論と主体性』(一九五二)もヒューム論であり、そこにはすでにこの冒頭の文章とほぼ同じ叙述がある。¹⁷⁾

ところで、一九五五年に、若きドゥルーズは、彼自身が編纂した思想文献資料集を『本能と制度』という題名で出版している。そしてこの資料集は、マルクス『経済学・哲学草稿』からの抜粋で締めくくられている。¹⁸⁾

ドゥルーズが用いた『経済学・哲学草稿』のテキストは、一九五三年にフランスで初めて出版された仏訳のテキストである。¹⁹⁾ ドゥルーズが抜粋した仏訳の箇所は、一九三二年に刊行されたいわゆるアドラツキー版のドイツ語テキストに合致している。その箇所は、草稿の読みに関して問題をはらむ文章を含んでいる。ドゥルーズが抜粋した箇所に含まれるフランス語の文章を訳出しておこう。

「活動と精神は、それらの内容からしても存在様態からしても、社会性に属しており、社会的活動そして社会的精神たるものである。」²⁰⁾

この文章の「精神 (esprit)」に相当するドイツ語は、アドラツキー版では「Geist (精神)」であるが、いわゆるデー

ツ書店版における読みでは「Genus(享受)」である。岩波文庫版『経済学・哲学草稿』の訳者は「内容からみて享受の方が適合している」と語っており、多くの邦訳も「享受」と訳しているが、ドゥルーズは、アドラツキー版に合致した仏訳の「精神」を含む文章に注目している。

さて、このようにマルクスの『経済学・哲学草稿』を重要視するドゥルーズであれば、この著作におけるヘーゲル批判を知らないはずはなく、そしてヒュームを唯物論の立場から不可知論者として手厳しく批判するレーニンの『唯物論と経験批判論』も知らないはずはないだろう。その仏訳はすでに、一九二八年には出版されているのだから。⁽²¹⁾だがドゥルーズは、ヒュームに熱狂したと語っており、ヒュームから出発しようとする。

この問題もやはり稿を改めて論じるほかはないが、ここではさしあたって、以上の段落に現れている「物質」と「精神」という言葉で、ドゥルーズが何を指し示しているかが問題になる。ヒュームにおける反復に関して、物質の状態としての反復と、その物質的反復を観照する精神が区別されているのだが、ドゥルーズは、ここで、「物質」と「精神」の二元論を主張しているのだろうか。他方、提示されている物質の例は、現代物理学が問題にする何らかの物質ではなく、ライブニッツの瞬間的精神(メンス・モ

メンタネア *mens momentanea*)⁽²²⁾という或る種の形而上学精神である。形而上学的精神としての物質を、観照する精神に対置するドゥルーズは、何を意図しているのだろうか。

《注》

- (1) 『差異と反復』河出書房新社、旧ハードカバー版一三頁、文庫版(上)一一～一二頁。
- (2) 『狂人の二つの体制一九八三―一九九五』河出書房新社、一五七～一五八頁。『差異と反復』アメリカ版への序文』というタイトルは、この書の編纂者ラブリッジャドによるものである。この序文は、もともとは、一九八六年にドゥルーズがフランス語で書いたものであり、それが英訳されて、一九九四年発行の英語版『差異と反復』の冒頭において、「英語版への序文」というタイトルで掲げられた。
- (3) 同書一六二頁。
- (4) ドゥルーズ『記号と事件』河出書房新社、一七頁。
- (5) 同書、旧ハードカバー版一七頁、文庫版(上)一八頁。
- (6) 『差異と反復』、旧ハードカバー版一九頁、文庫版(上)一九七頁。同書、旧ハードカバー版三七頁、文庫版(上)五二～五三頁。
- (7) 同書、旧ハードカバー版四二四頁、文庫版(下)三〇五頁。
- (8) 今後、いくつかの雑誌で本論を展開していく予定である。
- (9) 『差異と反復』旧ハードカバー版五五頁、文庫版(上)八五～八六頁。

- (10) アラン・ソーカル、ジャン・プリクモン『知』の欺瞞』岩波書店、二〇五～二〇七頁。
- (11) 『狂人の二つの体制 一九八二～一九九五』一六〇頁。
- (12) Veronique Bergen, *L'ONTOLOGIE DE GILLES DELEUZE*, L'HARMATTAN, 2001, p. 320.
- (13) MARTIN HEIDEGGER, *Kant et le problème de la métaphysique*, Gallimard, 1953, p. 227. ハイディッガー『カントを形而上学の問題』理想社、一八八頁以下。
- (14) Edmond HUSSERL, *Méditations cartésiennes* traduit par Peiffer et Levinas, ARMAND COLIN, 1931, pp. 66-67. 『世界の名著』51 ブレインターン『フッサール』中央公論社、二六二～二六四頁。
- (15) Gilles Deleuze, *Difference et répétition*, puf, 2011, p. 96. 『差異と反復』、旧ハードカバー版、一九頁、文庫版（上）一九七～一九八頁。
- (16) ヒューム『人性論』（一）岩波文庫二五二～二五五頁、二六〇頁。
- (17) ドゥルーズ『経験論と主体性』河出書房新社、九二～九三頁。
- (18) ドゥルーズ『ドゥルーズ初期』夏目書房、二二六～二二七頁。
- (19) KARL MARX, *ECONOMIE POLITIQUE ET PHILOSOPHIE*, Traduit par J. Molitor, TOME VI, Costes, 1953.
- (20) *ibid.*, p. 26.
- (21) 以上の点については、『経済学・哲学草稿』岩波文庫、白塚・田中訳、三頁以下、一三三頁、二七〇頁参照。
- (22) Lénine, *Materialisme et empiriocriticisme*, Éditions sociales internationales, 1928.
- (23) LEIBNIZ, *Die philosophischen Schriften* 4, OLMS, 1978, S. 230. 増永洋三『人類の知的遺産』ライプニッツ』講談社、二七四頁。